

21世紀における霊的生活： 暴力の犠牲者との連帯*

ジェレマイア・L・オルバーグ 著
許田 由美子 訳

キリスト教は暴力的状況に本来備わっている平和の可能性を顕わにしよう、というのが本論の出発点である。この新しい解釈は、もちろん、それ自体として浮かび上がってくるのではなく、むしろ、キリスト者が個々に、あるいは集合的に、生きていく中で具現化するものである。ゆえに信仰生活の新しいあり方が創造される。

このことは、21世紀において「霊的であること」あるいは「宗教的であること」について考える手立てとなる¹⁾。私のこの考察は、さまざまな宗教に当てはまるといものではない。むしろ、あえて私自身の信じる教えに集中して論を進めていくことによって、他の教えを信じる人々からの同類の考察を招きたい。

以前著した別の論文の中で私は次のように書いた。「キリストの受難は、その最も深い意味において、罪とは何であるかを示している。」すべての罪は、もっとも個人的な罪でさえ、犠牲者それも集団的暴力の犠牲者と密接に結びついている。ゆえに、我々のキリスト教信仰によって、暴力の問題と暴力への私たち自身の参加が、個人的な、そして集団的な問題の中心となる。本論ではこの主張をさらに深く掘り下げ、犠牲者こそが信仰生活の中心であり基礎であるということを明らかにしたい。

* 本号所収 Jeremiah L. Alberg, "The Spiritual Life in the Twenty-first Century: Solidarity with the Victims of Violence" の全訳。

1) 英語脚注参照。

現代社会における靈的あるいは宗教的生活²⁾の問題は、いくつかの異なる次元で理解または回答され得る。信仰生活に対する問いとは、すなわちそれ自体宗教的問いであり、したがってたとえば社会学的意味による答えではなく、宗教的な答えを得ることがここでの私の試みである。有名な「善きサマリア人」の物語の内に、いわば、思いをめぐらす事によって、私の考え方を提示していきたい。これは明らかに犠牲者との連帯についての物語であり、したがって私が展開しようとしている立場を適切に表している。同時に、この物語には驚くべき「ひねり」があり、犠牲者との結びつきに基づく信仰生活を送ろうとつとめることの意味を理解しようとするとき、これがその助けとなりうる。

福音書の中の他のいくつかの譬え話とは異なり、「善きサマリア人」の譬え話には背景があり、それもある程度はっきりとした背景である。ある「律法の専門家」が「何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか」という質問でイエスを試そうとする。イエスは彼に、「律法にはなんと書いてあるか。あなたはそれをどう読んでいるか」と逆に質問する。律法の専門家は愛についての二つの戒律「心を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、神を愛すること」、「隣人を自分のように愛すること」でもってそれに答える。イエスは彼の答えを正しいとし、それを実行すれば永遠の命を生きるだろうと告げる。しかし律法の専門家は満足せず、「自分を正当化するために」さらに尋ねる。「では、私の隣人とは誰ですか？」善きサマリア人の譬えは、この問いに対するイエスの答えとして語られる。

ここで立ち止まって、物語の背景に注意を向けてみたい。この譬え話の記述に至るまで、ルカはマルコ福音書の内容をかなり綿密になぞってい

2) 本論において用いられる「宗教的生活（信仰生活）」とは、信仰に基づく共同体のメンバーとして送る生活を意味する。カトリックでは「宗教的生活」とは普通、清貧・貞潔・従順を誓う修道生活を示すが、本論における意味には限定されすぎる。一方「靈的生活」は抽象的過ぎてしまう。

る。マルコ書（12章）では、律法学者がイエスに単刀直入に尋ねる。「あらゆる掟のうちで、どれが第一でしょうか。」ルカ書では律法の専門家が答えているのに対し、こちらではイエス自身が答えを与えている。律法学者はイエスの返答に賛同し、ほとんど一句違わず繰り返すが、さらに加えて、この二つの愛は「どんな焼き尽くす献げ物やいけにえよりも優れています」と答える。彼のこの言葉に至るまで、誰もいけにえや献げ物について話してはいない。これらはまるで何も無いところから突然現れたかのようである。同時に、この言葉は宗教に対する過激な批判である。マルコによると、イエスはこの律法学者が適切に答えたのを見て、「あなたは、神の国から遠くない」と言われた。イエスの一生とメッセージを通して神の国がその中心であったことを考えると、律法学者のこの言葉が並外れて重要なものであることが分かる。犠牲に対する愛の相対的重要性はイエスのメッセージの中心を占めている。一方ルカ書では犠牲に関する記述がすべて省かれ、代わりに譬え話が置かれている。「善きサマリア人」の物語を、「愛は儀式やいけにえよりも優れている」という洞察によって解釈することは可能だろうか？ 可能であると私は考える。

それでは物語に耳を傾けてみよう。

ある人がエルサレムからエリコへ下っていく途中、追いはぎに襲われた。追いはぎはその人の服をはぎ取り、殴りつけ、半殺しにしたまま立ち去った。ある祭司がたまたまその道を下って来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。同じように、レビ人もその場所にやって来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。ところが、旅をしていたあるサマリア人は、そばに来ると、その人を見て憐れに思い、近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のろばに乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。そして、翌日になると、デナリオン銀貨二枚を取り出し、宿屋の主人に渡して言った。「この人を介抱してください。費用がもっとかかったら、帰りがけに

払います。』

注目すべきいくつかの点がある。西洋では、この物語は頻繁に、「困っている人に対して背を向けてはならない」という意味で解釈される。ドイツには、しばしば「善きサマリア人の法」と呼ばれる法律さえ存在し、なんらの援助を施すことなく事故現場を通過することを罪としている。私は、人に親切にするということを教えるのに宗教や宗教的テキストが必要であるとは思わない。この物語はより深い意図の上に書かれているのである。まず第一に、しばしば沈黙の内に見過ごされていることがら、つまり、この物語の残酷な暴力性を、私たちは認識しなければならない。犠牲者は物語の中で、単に転んで怪我をしたというわけではない。彼は複数の人間によって襲われ、裸にされ、殴られて半殺しのまま見捨てられる。この物語に起こっていることは暴力的事件であり、被害者は暴力による犠牲者である。

マルコ書の中で律法学者の答え（愛はどんな焼き尽くす献げ物やいけにえよりも優れている）が神殿礼拝への批判を含むものであったように、この物語もそうであるように見える。通りかかる二人の人間が祭司とレビ人、つまり現代の我々の言葉で言えば、二人の司祭たちであったことは、偶然ではない。彼らはそれぞれ同じような行動をとる。襲われた人を見て、道の向こう側を通って行くのである。彼らはこの男から身を遠ざけ逃げる。なぜか？ 彼らは単に無慈悲で冷酷な人間だったのだろうか？ それがこの物語の意図していることだとは思えない。当時ギリシャ人は暴行を受けた人間を死んでいるように見えるものとほめかして描いた。二人の司祭が道端に見たものは、屍だったのである。司祭が死体と接触を持つことは、穢れたものとなることを意味し、したがって犠牲を捧げることが不可能となる。良い司祭であるために、また良い信仰生活を送るために、彼らは自分の宗教が教えているとおりに行動した。つまり「死体」に触れることを避けたのである。

この時、外国人であるサマリア人が登場する。彼は男を見て憐れに思い、福音書の見事な表現によると、彼のもとへと「近よって」来る（He went to him）。この一文はとても重要である。サマリア人は司祭たちとは反対の行動をとる。彼は油とぶどう酒を注いだ後、男の傷に包帯を巻く。なぜこの部分はこれほど詳しく描写されているのだろうか。それは、マルコ書の中の記述——「愛はどんな焼き尽くす献げ物やいけにえよりも優れている」を、この場面がまさに劇的に表現しているからではないだろうか。油とぶどう酒は、しばしば神を喜ばせるいけにえとして捧げられた。いけにえにおいて使用されるのと同じものが、いま、暴力の犠牲者の傷ついた体に塗布されているのである。このことは、愛がいけにえよりも尊いという以上の事を示唆している。いけにえのために費やされるまさにそのエネルギーが、いま犠牲者に向かって変換され、費やされる。再び私たちはマルコ書の反響をルカ書において見出すのである。

物語の最後に、イエスは質問する。「さて、あなたたちはこの三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。」律法の専門家は答える。「その人を憐れんだ人です。」イエスは言う。「行って、あなたも同じようにしなさい。」

しかし、本質的にはこの物語は終わってはいない。物語は「わたしの隣人とはだれですか」という律法の専門家の質問によって幕を開けた。譬え話はこの質問への回答として語られるのであり、イエスが最後にまったく異なる質問を投げかけているということによって、私達はこの事実から目をそらされるべきではない。ルカは私たちがもう一度物語に立ち戻り、もともとの質問に対する答えを求めることを望んでいるだろう。私達は、だれが追いはぎに襲われた人の隣人であったか知っている。私たちが絶えず問いかけ、見出すべきことは、「だれが私の隣人であるか」という問いへの答えである。物語のロジックによれば、「私の隣人」とは、私が裸にされ、殴られ、半殺しで放っておかれたとき私のもとに来る者である。

教父時代の伝統では、人類の状態は、道端に倒れている人間の状態に類

似するものとして理解された。私たちは死んで溝に打ち伏しているも同然なのだ。私たちは屍である。同様に、教父時代の伝統において、イエスは善きサマリア人の姿として認識される。イエスは私たちの元に来る人であり、私たちに対して憐れみ深い存在である。「行って、あなたも同じようにしなさい」というイエスの最後のメッセージは、とても実行することのできない命令——二人の司祭ができなかったのに、どうして私たちがそれ以上の事をできるだろう？——であるか、でなければ「イエスが私たちに示す憐れみは、私たちが他の人々に対して憐れみ深くあることによって実を結ぶのである」、という啓示であるかのどちらかである。この物語をこのように解釈することによって、はじめにイエスが私たちの境遇の中にやって来て憐れみを示し、それから私たちがイエスとの交わりによって、他の人々に憐れみを示すことが可能となるということを、私たちは理解する。

譬え話のこの特定の読みを薦める要素はたくさんある。この読み方によって物語は、助けを必要とする人々に対し思いやり深くあるべきである、という道徳的物語から、私たちが他者の生のうちに働くことができるために、神が私たちの生においてどのように働いているのかということをも明らかにする物語へと変貌するのである。実際の経験においてすべての人が暴力の犠牲者の元へと近寄って行くわけではなく、またこの譬え話はそのような人々のみに向けて語られているわけでもない。この物語は普遍的な意味を持っており、その意味とは、私たちの救済である。この解釈に伴って生じる問題は、通常の、私たちの良心を動揺させる解釈とは異なり、私の解釈は読者に神が実際に何らかの憐れみを示すことをまず期待させることにつながりかねないことである。自分自身が確かにその経験を得るまでは、私が変わる必要はない、ということになる。私たち一人一人が道端に倒れる人間であるならば、私たちはそれぞれの善きサマリア人を待ち望む事となる。

この考えを是正するために、物語がみずから私たちに語りかけることを

促すためのいかなる象徴的解釈を行うとしても、私たちは常に元の文字通りのレベルに立ち戻る必要がある、ということをお忘れてはならない。物語の逐語的レベルにおいて、真の犠牲者、つまり犠牲者のパラダイムとは、実際に振るわれた暴力の犠牲者である。私は象徴的読みとは、単に妥当であるばかりではなく、必要なのだと考えるが、それはその読みが逐語的の意味に根ざしている限りにおいてであり、その逐語的の意味によれば、現実の暴力による実際の犠牲者こそが、目下私たちの憐れみの文字通りの対象となるものなのだ。第一の優先は暴力の犠牲者にあるということについて、疑いの余地はない。

それでもなお、この解釈が、通常の「困難にある者を助けなさい」という解釈に対抗して、「暴力の犠牲者を助けなさい」というものであるなら、それはそれほど大きな進展だといえるのか？ という疑問が生じるかもしれない。私たちが、物語みずからが語りかけることを促すならば、物語はより深い層、すなわちより深い問いへと開かれるだろう。

第一の問いは、私たちを躓かせる (scandalize) ものについてである。

この物語を読んで、司祭たちの無情さに腹を立て躓かされること、また同じ理由で、サマリア人の親切さを支持することは、見たところ簡単なことのように見える。司祭たちの動機が宗教的なもの、つまりある意味で「良い」ものであるかもしれないということを理解したとしても、それでもなお、だれであれ自分の宗教を、助けを必要とするものに手を差し伸べる行為の妨げとすることに、私たちは怒りを感じる。この立腹は、物語の登場人物にというよりも、福音の著者あるいはイエスその人にさえ向けられるかもしれない。なぜならここでユダヤ教が不正確に描かれているのは明らかだからである。ユダヤ教において、苦悩にある人への援助は常に律法に優先するからである。しかし同時に、私たちはこのことを実現させない人々によって教化されてもいる。少なくとも幾人かの、最初にこの物語を聞いた人々は、おそらく躓かされ、まったく反対の方向へと教化されたとあろうと推測できる。彼らは律法に忠実な司祭たちによって教化されてお

り、いとも簡単にその法を覆すことのできる人がいるということにショックを覚えたに違いない。物語の聴衆が「まあ彼はただのサマリア人じゃないか。もちろん彼は何も分かってないのさ」といったとしたら、あるいは悪意を込めて「サマリア人からいったい何を期待できるのか?」と言ったとしたら、物語はよりリアリスティックになったかもしれない。

司祭、サマリア人、福音記者そしてイエスまたはキリスト教に対する躰きが、すべての外れのものであるということはある。この物語が私たちが攻撃するそのあり方は、私たちの個人的な悪魔がそのうちに潜む教訓である。したがって、私たちがもはや儀式的清らかさや穢れを信じないことは、もしかしたら良いことなのかもしれない。しかし、だれが良い人でだれが悪者である、そして私たちは良い者の側にいる、といった解釈の仕方は、この物語の趣旨を弱めてしまう。それは、私たちにとって「清らかな」とか、「穢れた」といったことが、もはや存在しないだけでなく、内集団とか外集団といった概念も存在しないという浅はかな思い込みを強めてしまう。またそのような解釈は、私たちが巧妙な方法によって世界を秩序付け構成しているということ、またその秩序とは、あるものには見分けられるがほかの者には隠されているということ、に対する盲目を強めてしまう。今日ドイツで反ユダヤ主義者であることが、またアメリカで人種差別主義者であることが、20世紀初頭においてそうであるよりも困難であるならば、それは賞賛されるべき事実である。しかしまた、私たちは、かつてより明白であった偏狭さの力が、より隠された、しかし同程度に有害で、いまある私たちのアイデンティティにとってなくてはならない偏狭さに替わっているという現実から目をそらすべきではない。ユダヤ - キリスト教の聖典、あるいは他の真の信仰生活についての解釈が、単に私たちの現代の生活様式を裏書きするものになってしまうことを私たちは容認してはならないと思う。私たちは人々を排除している。私たち独自の基準によって、だれが仲間であれがそうではないか、あるいは誰は受け入れ可能で誰はそうではないか、私たちは絶えず判別している。少なくとも1世

紀のユダヤにおいて、このような種類の排除はより単純なものだった。彼らはある人々を穢れたものであると公的に認めていた。

21世紀を生きるにあたって投げかけられるべき第二の問いは、「私たちははたして躓かされ得るのだろうか？」というものである。私たちは、私たちに挑戦してくるようなやり方によって躓かされることをあえて望んでいるだろうか？ 私がこう述べる理由は、もし躓かされるということが、犠牲者、つまり私たちが追放しようとしている、あるいはすでに追放した犠牲者からの問いかけと揺さぶりかけに、自らの身をさらすことであるならば、躓き（scandal）と共に生き、躓きから学ぶことが、私たちの信仰生活の中心的課題となってくるからである。

躓きに賛成するような話し方をすることは、「現代に順応する」ということではない。躓きの問題には、一見すると容易な答えがあるように見えるが、しかしそれはほとんど実現し得ない（私たちが実現を望まない）ものでしかない。つまり、「私たちにスキャンダルは関係ない。単にどんな人でも受け入れよう。生き、そして人を生かそう。なぜそこに問題がなければならぬのか？」といった答えである。私たちが当然のものとしている思考様式に対して躓きが示している障害の深刻な点は、私たちの思考様式に問題がないわけではないということだ。躓きは宗教的意識の本質的側面であり、単に否定的な意味合いのものではない。躓かされないという状態とは、神聖の極みに達した状態を意味するかもしれないが、むしろ、私たち自身がこの世界の中で麻痺してしまって、躓かされる能力を失ってしまっているという可能性のほうが大いにありうる。私たちが攻撃する犠牲者たちは、同時に、私たちの「正常」なあり方には根本的な欠陥がある、という事実を認識させてくれるのである。

グループ、そしてグループを構成する個人は、共通の敵に対して団結することで、あるいはグループの中の一人または数人を選び出してスケープゴート（身代わり）とすることによって、アイデンティティを確立する。当然ながら、私たちの敵対と団結の対象となる人々は、実際に何か間違い

を犯した人々であり、実際に危険な人々である。彼らが変わらない限り私たちも彼らを兄弟姉妹として愛することはないだろう。このようなことはいつでも起こっている。

このような基礎の上にアイデンティティを確立することを避けようとする試みは、賞賛に値するが危険でもある。自分とは異なるグループの迫害に参加しない、あるいは自分のグループの中の誰かをスケープゴートとすることに参加しないと固く決心をするだけでは充分ではないのである。そうすることによってあまりにも容易に、私たちは迫害者に対する迫害を始めてしまうからだ。

善きサマリア人の譬えが指摘しているのはまさにこの点なのである。犠牲者を通り過ぎることによって司祭たちが彼らの真の宗教的義務を果たすことに失敗しているとすれば、彼らを責めることによって私たちも失敗するのである。しかし一方でもし司祭を責めないなら、非難されるべき行いを大目に見るという危険がある。

上に述べたことを具体的に説明するために、私自身の体験を告白したいと思う。今みなさんには私の聴罪司祭となつていただこう。あるとき私は友人と車に乗っていた。ちょうどそのころ私たち二人の間にはある種の緊張関係があり、それについて何とか解決しようとしてみたものの、依然として対立は続いていた。私たちはお互いに相手に対して怒りを感じており、それぞれが相手に対してその責任を擦り付け合っていた。車に乗り込んだ瞬間から私はそこに緊張状態があることに気づいており、彼もそうであるということも分かった。私は車をスタートさせ、私たちが二人とも嫌っている共通の知り合いについての批判を始めた。すぐに彼も賛同して批判に加わった。二人の間にあった緊張は消え去り、ドライブは快適なものとなった。私は友人との関係を良くするために、その場にはいない人の評判を犠牲にしたのだ。

このようなよくある行為は、罪のないものではない。これは殺人へとつながる同じ道程にあるとイエスは教えている。第三者を糾弾することに

よってお互いを躓かせ、そして、躓きが生み出す一致によって生きることができる。私たちの社会の大部分はこの筋書きに沿って存在している。前に述べたように、この筋書きに従わないと単に決心するだけでは不十分である。躓かされる能力を保ちつつ、それに屈しないでいることが必要なのである。

以上の説明を踏まえてはじめて、現代における信仰生活についての私の定義、つまり、暴力の犠牲者との関係の内にあるものとしての信仰生活と、通常理解、つまり儀式と教義としての信仰生活とのつながりを示すことができる。

ここまで私が説明してきた立場によれば、明らかに、いかなる事であれ本質的に真に宗教的であるかどうかの直接的な基準は、どの程度それが犠牲者との連帯へと私たちを動かすものであるか、ということである。そして同じく明らかに、私が善きサマリア人の物語に対して与えた解釈の示唆するところによると、伝統的宗教、焼き尽くす献げものといけにえ、司祭職、つまり儀式と礼拝は、神への愛と隣人への愛に比べれば重要ではないだけではなく、それらは最も本質的な愛の表現、つまり犠牲者への憐れみを妨げるものとさえなり得る。

しかし宗教が生み出すこの妨げは、躓きの障害となるものである。司祭たちは死体の存在によって躓かされ、私たちは司祭たちの行為によって、または司祭たちを悪者に見せるこの譬え話によって躓かされる。これらの躓きそして障害のどれもが、犠牲者のより深い現実への架け橋となりうる。教義と儀式の意義は、私たちが躓きを体験しそれと共に生きることを可能にするというところにあると私は信じる。

この21世紀のはじめに、ほかならぬ今、教義は私たちと深い関係がある。「私たちはもはや特定の教義によって躓かされたりはしない。(三位一体における)『父』と『子』の一体性をめぐって論争することもない。現在教義の存在そのものが攻撃的なものなのである。誰も教義主義となることはないだろう。プロテスタント教会とカトリック教会は、なんであれ細

かい違いを乗り越え、またなんであれ一つの同じものを信じるということに重きを置くべきだ。様々な宗教はそれぞれの教理信条を忘れ、その代わりに他のすべての宗教と、すべての善意の人々と共に一致できるような価値観に集中すべきだ。」このような意見は頼もしく聞こえるし、私もそれを軽視するつもりはないが、躰きが私たちの救いにおいて演じる役割を見過している。それがキリスト教的躰きではないとしても、理性的思考は命の神秘を扱うには不適当であるという考えは諸宗教の間で普通に見られる。私たちが正常な機能と考えるものは、実は幻想であるという考えは、すべての偉大な宗教に見られる。キリスト教においてこのような考えが明示されるのは、一つには教義と儀式の躰きを通してである。

教義それ自体が信仰の神秘を理解するための理性的試みである、という主張は間違っていない。しかし、私が指摘したいのは、教会が、たとえば三位一体とはその厳密な意味における神秘であると定義するとき、それは三位一体が理性的理解を超越したものであることを意味する、という点である。神秘が啓示しているところのものを能力の限り理解しようとつとめることは、価値のあることではあるが、この場合教義は否定的な仕方で見えるように見える。つまり、私たちが誤ったときそれを知らせるのである。そしてその究極的理由は、誤解はその神秘の神秘性を奪い去り、その結果躰きをも取り去ってしまうことである。教義による躰きは信仰による躰きを護るのである。

カトリック教会における儀式について、とくにその第一の儀式である秘蹟についても同じことが言える。秘蹟とはまさに宗教的躰きそのものである。このパンの一片をキリストの肉とし、この一杯のぶどう酒を彼の血であると宣言することのスキャンダラスな性質は、私たちが慣れ親しんでいるからと言う理由によって、脇へ押しやられるべきではない。秘蹟における躰きの意義は、現実にある神秘へと私たちの目を開かせることにある。日常の事物が神聖を持つと気づくことは、躰きになりうる。神はもはや天国で安全におさまっていない。平凡な人類のありふれた葛藤は、神の恩

寵によって満たされ、罪によって損なわれる。この暴力的な世界において、道端に横たわる誰かを見て憐れみに心動かされる人のかたちで、十字架にかけられた男を通しての救済のかたちで、神の恩寵は出現する。

譬え話、教義、そして秘蹟の働きは、キリストその人の働きである。それは救済への入り口となるものであるが、しかしまた、躓きによって絶えず破棄される可能性を持った道によってのみ、到達可能な入り口でもある。それ故に、私たちが躓かされることへの誘惑と闘わないならば、またその攻撃を避けるために、部屋を横切り聖書のそばを通り過ぎようとする誘惑にあわないならば、私たちはおそらく、何かを見落としているのだ。

なぜなら、譬え話、教義、そして儀式が何らかの形で私たちの理解の妨げとなる時のみ、それらはより深い理解への架け橋となりうるからである。それは、自然人は死に向かって進んでおり人生を死の対極として捉えるのに対し、実際は、生とは死に対向して立ちはだかるものではなく、死を包み込み、死を含み、変貌させるものであるからである。

話を元の譬え話に戻そう。最後の問いが私たちに対峙している。司祭たちのヴィジョンを批判することなく、いかにしてサマリア人のヴィジョンを得ることができるだろうか？ いかにして、犠牲者を遠ざけるのではなく、彼らに近づいていくことのできる宗教的感受性を持った人間になることができるのだろうか。いまいちど、物語の中に答えを求めてみたい。

物語全体に流れる背景を再び思い出していただきたい。それは、「あらゆる掟のうちで、どれが一番でしょうか？」という問いであった。それに対する答えは、神への愛と隣人への愛であったにもかかわらず、この答えが出された後、「神への愛」は姿を消してしまったように見える。物語の残りの部分は、誰が私の隣人で、そして隣人となるにはどうすればよいかについて語られる。その結果、ある解説者などは、神への愛と隣人への愛を単に同一視しているほどである。しかしこのことは、もっとも大切な掟についての質問の答えが、二つの掟である、という重大な事実を見失っている。

福音を読み進めていくと、ルカが神の愛について何かを伝えようとしていることに気づく³⁾。善きサマリア人の物語が終わり、私たちはルカによる記述、つまりイエスのエルサレム登城の記述にもどるが、そこには善きサマリア人の譬え話と、マルタとマリアをめぐる話をつなぎ合わせることを助ける手がかりがいくつかある。当然ではあるが、第一には、現代版の聖書に挿入されている小見出しおよび段落分けによって気づきにくくなってはいるが、テキストそのものが並んで配置されている点である。その上最初の物語は「ある人が」という言葉で始まっており、そこにはなんらか変わった点はないが、次の物語もまた、「マルタという名のある女が」で始まっている。奇妙な構文ではあるが、善きサマリア人の物語の出だしと文法的に平行なものにするためであるように見える。この並列は、第一の物語が男性を、第二の物語が女性を主人公としている事実によって強められこそすれ損なわれるものではない。ルカはしばしば互いに並行する物語において、男性と女性を交互に使っている。ザカリアとヨハネの誕生の告知、そしてマリアとイエスの誕生の告知はそのもっとも明白な例である。

そして最後に、最も重要な点として、マルタとマリアの物語は、善きサマリア人の物語に欠けている要素を補うものである。イエスはマルタとマリアの家を訪れる。マルタはイエスの給仕をする。マルタは、自分一人がすべての作業を行う一方で、彼女の姉妹マリアが座ったまま何もしないでいるのを主が許していると言う事実に躓かされる。マルタはイエスに小言を言い、マリアに手伝うように言うようたのむ。しかしマリアは、すべきすべての事の中から、イエスの足元に座っていることを選んだのである。イエスによるとそれは「良い」ことであり、それを彼女から取り上げるべきではないという。さて、イエスの足元に座るという行為は、初代教会において、観想的祈りを意味する一種の省略表現であった。これらの二つの物語をあわせて読むならば、私たちはより充実した図式を理解でき

3) ギル・ベイリーによるルカ福音書講義の録音から洞察を得た。

る。私たちは犠牲者を憐れむべきであるが、そのような行為を起こさせるヴィジョンは、イエスの足元に座ることによってのみ得られる。そうでなければ、マルタのように、たくさんのことをして忙しくなり、奉仕することによってさえ、もっとも大切なことは何であるかを見失ってしまう危険をおかすことになる。

犠牲者、神の子羊、イエスキリストを見つめることは、私たちの魂が、十字架と復活の光によって背後から照らされているものとして世界を眺める訓練となる。それは、「内側」や「外側」など存在せず、受け入れるべき人も受け入れざる人も存在しないという事を私たちに教えてくれる。それはいかなる二重性も、神への愛と隣人への愛の二重性でさえも、破壊する。なぜなら、この二重性は、最も基礎的な区別、つまり迫害者と犠牲者の間の差異に立っているからである。(私自身が迫害者の側に立っていることは承知している。)しかし私は自分自身が許されていることによって、そして犠牲者と共にあることによって、そのことを真に知るのである。